

岐阜県垂井町の循環型の暮らしから考える 持続可能性

朝倉 さち、阿部 琢人、内田 夏未、郭 潤婧、川嶋 優衣、
中野 建伸、林 駿一郎、林田 宇蘭、松本 泰地

はじめに

国際学部グローバルスタディーズ学科斎藤ゼミでは、SDGsに代表されるような持続可能な社会の実現に向けた取り組みについて学んでいる。今回の2021年10月14日の課外研修では、岐阜県不破郡垂井町の特定非営利活動（NPO）法人泉京・垂井が受け入れ先となり、ゼミ生9人と斎藤教授の計10人が日帰りで訪問した。かつて交通の要衝であった垂井町も今では過疎化による様々な課題を抱えている。他方、日本で最大級のフェアトレード祭りを開催するなど、フェアトレードタウンとして認証を得ることを目標として、持続可能なまちづくりに向けた独自の取り組みを行っている。これらの現状から、持続可能な開発のあり方について学ぶことを目的とし、研修を実施した。

本報告書では、垂井町に住む方々に直接伺った垂井町の歴史や、垂井町の由来である水を活かした生活について振り返り、その上で町が今抱える過疎化や高齢化問題を克服する可能性について考察する。そのため、本論に記載する情報は基本的に現地訪問時に伺ったお話しや関係者から教わった内容に基づき進行する。

1. 流域思考によって垂井町を見る

初めに受け入れ先団体であるNPO法人泉京・垂井の副代表である神田浩史さんからお話を伺った。

神田さんは地域の持続性を高めるためには「流域思考」が大切であると強調された。「流域思考」とは河川などの流域単位で物事を考える考え方であり、様々な地域において昔から存在してきた。

通常、流域は3つに分けることができ、上から上流域、中流域、下流域といわれる。上流域の森林は

水源の保持、地盤の安定化、生物多様性の保護など様々な役割を担っており、それらの恵みを受けて、中流域では食糧などの資源活用が可能となる。また下流域では田畑や漁場での生産活動が可能となる。また、資源の流れは上流域から下流域への一方向だけではなく、下流域で生産された資源、商品が上流域へ供給されることも多くあり、相互に関連性は否定できないものとなっている。このような仕組みの結果、上流域においては林業、中流域には農業、下流域には漁業や加工業・製造業といったそれぞれの主要産業が形成される。これら各地の産業は同じ流域に存在していることから相互依存関係にある。このような相互依存性はアジアモンスーン地帯において共通してみられるものであり、70～100年まで流域単位での循環型社会が形成されていた。しかし、近代化の過程でそのような思考が消えていったことが今日の諸問題の原因にもなっているため、神田さんはこの流域思考に着目することが持続可能な地域社会を実現するヒントになるという。各地域の存続に関して上・中・下のそれぞれの地域が維持された上で、地域間の結びつきが蘇ることは極めて重要である。

しかしながら、近年のグローバル化にともなう資源の移動、また都市化の進展によって流域単位での活動は衰退しつつある。海外からの安価な森林資源、食品の流入によって上流域で林業にかかわる人、中流域において農業にかかわる人が共に減少しつつあり、今まで形成されてきた流域単位での社会の在り方が維持されなくなってきた。神田さんが考える理想的な社会の在り方としてはかつてのような流域単位の循環型社会であり、その再構築を今こそ目指すべきだと考えている。神田さんは、目指すべき良好な状態を穏豊（おんぼう）社会と呼んでい

る。穏豊社会とは神田さんが考えた社会のあり方であり、現在の収奪型の社会ではない、循環型社会が再構築された社会を指している。現代の持続可能な生活様式を変化させ、かつてのように流域単位で形成されていた循環型社会を再び実現することが神田さんたち泉京・垂井の目標である。

2. 垂井町の特徴

垂井町は木曾三川の一つである揖斐川の流域に位置し、かつては東西を結ぶ交通の要所であった。町の名前は「垂井の泉」が由来であり、豊かな水を活かした生活の風習が昔から続いている。揖斐川の水源地は岐阜県揖斐郡揖斐川冠山にあり、川の総延長は121 km で岐阜県西南部・三重県西端・滋賀県東端まで流域が広がる。揖斐川の下流水面は居住地よりも高いところも少なくない。流域に属する垂井町でもその地形による生活の工夫が見られる。

垂井町は、滋賀県と岐阜県の両県にまたがる伊吹山の麓に位置し、関東や関西といった東西の地域の境目にあり、様々な食・言葉・風習が入り混じっている。そのような地理的条件が、日本各地との交流を生み、この地の文化を育んできた。また、垂井町はかつて旧中山道（江戸五街道の1つ）と旧美濃路の分岐点で、江戸時代には交通の要衝として栄え、今も垂井宿や旅籠の跡がみられる。また、黒田官兵衛や竹中半兵衛の所縁の地として知られており、関ヶ原の戦いなど、合戦の舞台として有名であることから、垂井城跡など歴史的な建築物が多数位置している。

垂井町の変化を人口の観点から見ると、2000年の人口は28,935人、15年後の2015年には27,837人と、人口が徐々に減少している事が分かる（垂井町2015）。人口減少に加えて、高齢化も上げられる。2015年の時点で人口の28.0%が65歳以上である事が分かっている（垂井町2015）。加えて同町の調査によると垂井町の人口はこれからも減少の一途をたどり、ますます高齢化が進むことが予想され、2060年には人口が約35%減少し、65歳以上の高齢者の割合は35.6%まで上昇するであろう（垂井町2015）。このように垂井町において人口面で減少かつ高齢化が見られた。

また、行政面の変化としては昭和29年に旧垂井

町を中心に周囲7つの村が合併し現在の垂井町になっている。それ以降にも合併の案は上がっており、今世紀に入ってからすぐの大合併案（岐阜県西南部の一市九町を合併し大垣市とする発案）に関しては垂井町内でも大きな議論を呼んだ。町内が合併賛成派と反対派に二分されてしまい、住民の間に大きなしこりが残るものとなった。この対立によるわだかまりの解決を目指して設立されたのが今回の視察を受け入れてくださったNPO 泉京・垂井である。発足当時から現在まで垂井町での活動内容は多岐に及ぶようになった。

3. NPO 法人泉京・垂井の活動内容

NPO 泉京・垂井は、2005年にできた垂井町で初めてのNPO 法人である。この法人の主要事業は、フェアトレード、SDGs 非営利コンサルティングの2つである。

第1のフェアトレードについて。ここでは、「フェアトレードデイ垂井」が毎年開催され、物販・飲食などの魅力的な店が多く出店され、大勢の人たちで賑わう。このフェアトレード・デイの場から新たな市場やビジネスが生まれており、このような可能性に魅せられた若者たちが垂井町への移住してきている例もみられる。（そのため、NPO 泉京・垂井もこのような移住をより促進しようとしている。）

フェアトレードを広めるための学習会として、今年（2021年）11月3日に「はじめましてのフェアトレード」を開催予定である。これは、一般社団法人日本フェアトレード・フォーラム代表理事の原田さとみさんをゲスト講師として招き、SDGs やフェアトレードなどの基礎知識などの基本講座、まちづくり活動や地域活動にSDGs やフェアトレードを取り入れるヒントを伝えるなどの豊富なコンテンツとなっている。また、オンラインからの参加も可能であり、会場参加者にはフェアトレード製品のお土産をつけるなど、活動のための細かい工夫がなされていることがわかる。

第2のSDGs 非営利コンサルティングの例として、泉京・垂井は、今年（2021年）からJICA 国際協力人材育成事業を開始した。その事業の一環で私たち斎藤ゼミの生徒は、“ローカル・ガバナンス（地域のお作法）”などを学ばせていただいた。

また、この地域には泊まれる神社として「YADOYA IBIGAWA」がある。ここは、五右衛門風呂やカマドなどが残る古民家であり、古き良き日本の伝統的な空間が楽しめ、海外のお客様などにも人気であり、地域の特性を活かしている。この宿泊施設は大きな宣伝をせずとも来客者が絶えないことから、今後の地域活性化の基軸となる可能性を秘めている。

このように、NPO 法人泉京・垂井は、穂豊社会の実現のために、食・水・エネルギー・おカネ・人の繋がりの強化をしている。

4. 歩いて学ぶ垂井町

この日の午後の研修では、参加した我々は4つのグループに分かれて、垂井町街角案内の会に所属する4名の方々と共に町を歩き、その間にさまざまなやり取りをして地域の実情について学んだ。

4.1. 特別な存在としての「水」

垂井町での暮らしには「水」に特徴がある。垂井町は独特の水文化の上に成り立っていることが今回の現場研修においても感じる事ができた。

垂井町においては清水が湧いており年中一定の温度のきれいな湧水が利用できる状態になっている。これらの湧水は地元の住人によって管理されており、どこの水をどの用途に使うかなどが定められている。湧水は飲用に使われたり、収穫した野菜や食器などを洗う際に用いられたり、洗濯などに使われることが多いようだ。実際、我々が街を歩いている中で洗濯をしている方や野菜を洗っている方にお話を伺う機会もあった。湧水は定期的に近隣住民によって管理されており、その結果清澄な状態が維持されていることが分かった。地域の住民が自分で使う水を共同で管理することで、貴重な湧水を長く残していけるのだという。

また、その「水」は、まちづくりの観点からも活かされている。例として、垂井町の家の前などには用水路が敷かれている。これは、町が作られる段階で、家の近くなどに湧水が流れる用路があるように設計されたためである。こうなった理由としては、過去において町が無くなるほどの大きな火事が3度起こったことがあるとの説明がなされた。そのため

に、その湧水や町の3つの井戸からの防火用として「水」が使われ、火事が起きた際の鎮火に利用されていて、現在でも使われている。

その一方で、湧水の1つが今は使えない状態になっているお話を伺い、その理由が土壌汚染にあると指摘された。汚染が実際に与える影響を感じることはあまりなかったが、垂井町においては湧水を飲用として利用している方もおられ、その様な場合には直接的影響が及ぶため重大な問題となる。このように垂井町においては独特な水とのかかわり、水の共同管理からみられる地域ぐるみでの持続可能性の考え方を学ぶことができた。



図1 湧水と貯水池



図2 湧水と野菜を洗う地域住民

4.2. 多様な文化の開花

垂井町の文化は日本各地との交流によって育まれた。代表的なもの1つとして毎年5月2日から4日に開催される「垂井曳やまつり」がある。この祭りは南北朝時代の文和2年から660年以上続くも

ので、高さ9mの漆塗りや蒔絵、彫刻金具などで施された「曳軸」を数十人で引いて町内を回り、舞台上では子供たちが歌舞伎を披露する。この祭りは元来、北朝の武士が京都から逃れた際、彼への慰めとして行われた踊りが始まりといわれている。

また、かつては美濃の国府がこの垂井町におかれていた。奈良時代には垂井町で作られた和紙が、正倉院にも残されており、その和紙は後にしばしば最上級の国産和紙であると評される美濃紙の原型とされ、現在垂井町内には紙屋塚が所在する。このような歴史的な経緯も、当地が交通の要衝で、古くから人の往来が盛んであったことに起因する。

このようにかつて交通の要衝として栄えた垂井町には、将軍などの位の高い者が宿泊した本陣跡もある。江戸時代には、屋号の看板に、武士が多く通る北向き（江戸方面）には漢字を、女性や庶民の通る南向き（京都方面）にはひらがなが用いられた。これを参考に、今も屋号の看板が旧街道の商店には着けられている。また、垂井宿の門番がいた東の見付には、現在は相川橋がかけられているが、旅客を担いで川を渡る仕事も江戸時代には存在し、多くの人で賑わった様子がうかがえる。

しかしながらこのような垂井町も現在は人口が減り、歴史的建造物を維持することも難しいといった問題も抱えている。また、先ほどの湧水にしても、水の管理を担当する人々も過疎化により少なくなっており、人口減少が持つ負の影響を感じた。

4.3. 過疎化との格闘

街角案内の会の山村さんに垂井町を案内していたとき、その中で、垂井町が次第に過疎化していった状況を伺った。今の垂井町には、江戸時代に交通の要衝として繁栄していた名残はもはやなく、シャッターを閉じた商店が並ぶ閑散な場所となっている。案内をして下さった山村さんは幾度も「旧中山道の東町のシャッター商店街に対して何か良い方法があれば、教えてください。若い方々の意見が聞きたい。」と私たちに話された。

旧中山道は閑散としていたが、一方で、町の中心を流れる相川を超えた先には全国チェーンの有名なスーパーやドラッグストアなどがあり、山村さんはそれらを指し「垂井町は若い人が少ないわけではな

いが、若い世代はスーパーなどの近くに住み、不便な旧中山道には住まない。」とおっしゃっていた。

加えて、山村さんは過疎化の原因として、東町のシャッター商店街に住む人々の改善意欲の低さを取り上げた。「東町に住む人々はほとんどが高齢で、自分達がこの世を去った後の街のことは考えない。だから自分達の世代で商売をやめ、子供世代はより便利な市街地に住む。そして今の住人はこの流れに対して意欲的になれない。そこに外部から活動を伴わない、無責任なアイデアの提案をしても無意味である。」とおっしゃっていた。同じ垂井町の住人の中でも、山村さんのように過疎化を危惧している人々とそうでない人々が存在していることが伺えた。これらの経験から、地域創生を行うためには、新旧世代共に問題意識を共有し、企業・自治体・個人がそれぞれのアプローチを行う必要があると考える。「過疎化をどう防ぎ、食い止めるか。」山村さんが幾度となく私たちに問いかけた課題は、私たち若者世代が早急に取り組まなければならない問題であると考えた。



図3 旧中山道の東町のシャッター商店街

4.4. 高齢化とコロナ禍による影響

垂井町の過疎化や高齢化は、地域の祭りなどの文化にも大きな影響が出始めている。まず1つが「曳軸を維持するための技術人や経費がなくなってきていること」である。お祭りで使用される曳軸の車輪は定期的に交換する必要がある、1つの曳軸に対しその費用は約300万円という莫大な費用がかかる。さらに町の過疎化、高齢化に伴いそれらを修理・維持する技術人も年々少なくなり、費用の問題もあわせ、曳軸自体の維持の問題が深刻である。また、曳軸の舞台の上で歌舞伎をする子供たちの立候補者数

も年々減ってきており、子供歌舞伎の継承者がだんだんいなくなってきたというお話も伺った。

垂井曳やままつりに伴い、相川沿いで行われる相川鯉のぼり一斉遊泳も毎年行われていたが2020年からは新型コロナウイルスの影響で垂井曳やままつりともに中止になってしまった。町の過疎化・高齢化、さらに予測不能な新型コロナウイルスの影響で町の文化財が次々と危機に晒されているという現状を目の当たりにし、移り変わり行く時代の中で“人”そのものがあるということの重要性、そして有形、無形問わず町の伝統的な文化財を継承していくことの難しさを痛感した。

5. まとめ

今回、ゼミでの岐阜県不破郡垂井町での1日現場研修を通して、垂井町独特の水文化や地域のコミュニティを五感で感じられる、貴重な経験となった。

揖斐川流域訪問で学んだ流域思考からすると、持続可能な社会の実現は世界規模で取り組まなければいけない課題ではあるが、大きな枠組みで捉えるだけでなく、まずは国内のローカルな部分に目を向ける事が循環型社会の実現に必要な事を学んだ。地域に根ざした活動が、グローバルな課題解決にも繋がってくるのだ。

私たち人間が自然に生かされている限り、農林水産業や住民主体の資源の管理といったこれまで営まれてきた「地域のお作法」が大切である。森林や田畑が適正に管理され、保たれるからこそ水環境が守られ、国境を越えたグローバルな経済活動等の繋がりが保たれる。

しかし、今日では、経済活動がともすると優先さ

れ、便利で何でも手に入る都心に人々が流れ、上流や中流の集落では人口減少や超高齢化が起きている。このような日本の社会問題は、循環型社会の維持や実現を困難にしている。今まで維持されてきた営みが、今の世代で途絶えてしまうと、今後の社会の維持も厳しくなる。

困難な状況にあっても、「水」を介してコミュニティのつながりが深い垂井町であるからこそ、行政、NPO、住民など様々なアクターが協力し、文化を守り、人と人の結びつきを維持・継承していきたいと思う人が多いのではないだろうか。

循環型社会が再構築された社会をイメージし、穏豊社会を体現する揖斐川流域垂井町で、一つずつローカルな営みを重ねていくまちづくりの大切さを学んだ。

謝辞ならびに弔辞

今回の訪問にあたってはここに記載された方々の多大なご協力を頂きました。ここにお礼申し上げます。

また大変悲しいことに、当日街を案内して下さった方のお一人である木村さんが、この直後にお亡くなりになられたとの悲報に接しました。ここに謹んで謹んでお悔やみ申し上げますとともに、心からご冥福をお祈りいたします。

参考文献

神田浩史 (2021) 「穏豊社会を目指して 揖斐川流域での実践から」(訪問時配付資料)

垂井町 (2015) 「垂井町人口ビジョン 垂井町まち・ひと・しごと創世総合戦略」[オンライン] 以下で利用可

<http://www.town.tarui.lg.jp/docs/2015042400013/files/1visionsenryaku.pdf> (2021/10/30 アクセス)